

6年1組

堀越信司さんとの出会いから考えた共生の理念



## 堀越信司さんとの出会いから受け取ったこと

10月18日。堀越信司さんとお会いしたのは、子どもたちにとって、一緒に走ったり、お話を聞かせていただいたりする中で、自分の考えや価値観を広げていった1日になったのではないかと担任は感じました。

堀越さんが校庭で語った後、これから走りだそうとする時には、椅子に座っていた子どもたちも身を乗り出して、その走りを間近で見ようとしていきます。子どもたちは一緒に走ったり、堀越さんの走りを見たりしながら堀越さんのことを感じていっているようでした。

お昼を挟んで、講演会。体育館に着くと、演題が目に入りました。「個性輝く『共生』社会」という言葉でした。講演会を通して語られたことはいくつかありましたが、「共生」ということに対して堀越さんは、「相手を理解しようとしていくこと。そして、自分のこともわかってもらえるようにすること。つまり『相手を理解し合おうとすること』これが人間の強みでだと思う」と力強く語っておられました。谷浜鍛錬会や美と力を通して、私たちが大事にしてきた、「相手を想う」ということと自分にはつながりがある言葉として受け止められました。教室に戻り、今日の振り返りをしようとしたとき、私は「堀越さんの講演を聞いて考えたこと」と黒板に書いていると、Sさんから、「先生、走っているときのことも振り返りたい」という声が聞こえてきました。「ああ確かにそうだよな。堀越信司さんから受け取ったものは、堀越さんのお話だけじゃないよな。」とSさんに気付かされ、「堀越さんとの出会いから、考えたこと」と書き直して一人ひとり振り返りをしていきました。これからみんなと考えて見たいな。そう感じる振り返りがいくつもありました。



堀越さんとお会いして、なにか新しいものを掴んだ感じがします。なにかのきっかけで自分の将来が決まったりする。そんなきっかけを見つけやすくしてくれた感じがします。堀越さんは陸上の話をしていましたが、陸上に限らない話でした。何回も諦めずに戦った未獲得した銅メダルは、光って見えていたと思います。しかし、そこで諦めずに上を目指す姿がすごかった。自分もそのような人間になりたいです。でも、いきなりそんな人になるのは無理なので、一つ一つ課題をこなして行って、地道ですが一番確実な方法で、夢を叶えたいと思います。一人じゃできなくても、人間に与えられたアドバンテージ「共存」という能力を使って、自分だけでなく、6-1の仲間やこれからの人生の中で出会う色々な人と「共存」し、夢を沢山叶えたいです。(Sさん)

私が堀越さんとお会いして思ったことは、片目が見えなくてももう片方の目も0.03と非常に悪い状態でどうしてそんなにも頑張れるのか不思議でした。目が見えにくいことはとても不便だと私は思います。でも私は目が悪くなったことも目が見えなくなったこともありません、だからわかりません。けれど堀越さんみたいな目の悪い人がたくさんいます。そんな人達に勇気を与えてくれるような人だなと思いました。あと、目が悪くても自分でできることを精一杯できることがすごいと思いました。これから私は障がいのある人や困っている人を助けられるようになりたいです。堀越さんのお話を聞いて本当に良かったし堀越さんのお話めっちゃ面白くて楽しかったしあと堀越さんの母校がここだって知らなかったです。これからも頑張ってください。私も自分のできることをこれからも頑張っていきたいです。(Aさん)

## 厳しい戦争中にも見られた共生の理念

10月の堀越信司さんとの出会いをきっかけに、「一人ひとりが生きるのに精一杯だった戦時中（パラリンピックが始まる前）、障がい者はどのように生きていたのか」という問いを抱き考えてきました。当時の子どもにとって疎開をするとはどういうことかを考える場面では、「疎開は怖さ、寂しさがあると思うけど、自分よりも違う人（子ども、障がい者、高齢者）を優先する人たちが少なくとも一人いることが一つの救いになると思う」というNさんの振り返りを紹介すると、Rさんは、「自分のことで精一杯だから、そういう人はいなかったと思う」とはっきり言いつつも、すぐに「でも、もしかしたらいたかもしれない」と語っていました。この語りはRさんの「そうあってほしい」という願いにも聴こえてきました。その後、当時の東京に日本で最初の肢体不自由児の学校である「光明国民学校」があったことを、当時の子どもたちの写真とともに伝えると、Rさんは、「東京大空襲の時、光明国民学校の子どもたちはどうしていたのかな」とつぶやきました「どうしてそう思ったの」と聞くと、Rさんは言葉を選びながら「アドバンテージがある分、やっぱり命を落としてしまったんじゃないかな」と語りました。これまでの戦争の学習の中で、Rさんは「市民は悪くないのに．．．」と語った後、「本当の辛さは体験した人にしかわからない。でも、このことを伝えていかないと（戦争の恐ろしさが）薄まっていっちゃう。そうするとまた同じことが起きちゃう。俺はそれが怖い。だから伝えていかなきゃいけないと思う」とも語ってもしました。

東京で空襲が激しくなってきた頃、光明国民学校の松本校長先生が、学校に防空壕をつくり現地疎開をしたということや、上山田村（現在の長野県千曲市）に自分達の手で疎開をしていった事実を知った子どもたちは、戦時中の厳しさの中でも、松本校長先生や上山田ホテルの方々など、子ども達一人ひとりの命を守ろうとしていった人たちがいたことに気づいていきました。

堀越さんが語られていた「共生」という言葉。この理念が戦時中もあったこと。そして「障がい者」との「共生」を目指していける今の社会の良さに目を向けて、よりよく生きていこうとする子どもたちの考えを大切にしていきたいと思いました。

ぼくが思った一人ひとりが生きることが難しい中、松本校長や上山田ホテルの方々の行動したことについて、すべて子どもたちのためにやっていると思いました。自分の命を犠牲にしても、子どもたちを守ろうとしていたと思った。松本校長が頑張ったおかげで、命を落とさなくてすんだ。それがすごいとぼくは思った。（Yさん）

松本校長は自分のことなんてどうでもいいと思ってもうちょっと自分のことを心配してと言いたくなるくらい子ども優先で考えていてとてもびっくりしました。松本校長は親のために頑張っているとかそういうのより、何よりも子どもを守りたいという気持ちがとっても強くてすごい人だなあ～と思いました。上山田ホテルの人も松本校長と同じで何よりも子どもを守りたいという気持ちが強い人が女将さんなのか色々考えてもやっぱり松本校長と上山田ホテルの方々は子ども優先っていう戦争中の人の中には珍しい人だったのかな。今の時代はその考え方が普通だけどその戦争中はそんな人は少なかったのかな。僕も将来障がいがある人にも目を向けられる大人になりたいです。（Aさん）